

SSKW

海から海へ

No. 39 2015. 8. 26 【編集人】

特定非営利活動法人 海から海へ

〒182-0024 東京都調布市布田 1-32-5

マートルコート調布 407

Tel 042-441-2958 Fax 042-497-4878

<http://umi.or.jp> office@umi.or.jp



ふたりの海水浴 Sea Bathing of Two 727x910 2003 © Mizuki Tanaka

海から海へは、障がいをもつ人から渡される豊富なものの存在に気づき、人々と共有するため、障がいをもつ人を中心とした、文化芸術活動、研究活動、社会教育活動、心理カウンセリングなどの支援活動を行うこと、および、それらの活動を通し、障がいの有無にかかわらず、地域・国内・国外を問わず広く交流を深め、人々がより良く生きること貢献することを目的として活動しています。

沖縄紀行

阿部愛子

画家は旅のガイドブックを毎月のように買い求めてきた。自室の本棚に沖縄の数冊がある。沖縄は遠い場所だからそのうちに何かの機会で行ければよいくらいに思っていた。あえて3人の休暇を調整して出かけようとは考えていなかった。けれど、ある日の夜、新聞の夕刊にツアーの広告を目にしたことがきっかけとなり、旅の話で我が家は盛り上がった。「行ってみたいね、沖縄」から「さあ行こう、沖縄へ!」と。3人が好奇心でわくわくする夜だった。

以前、福祉作業所で働いていた頃は年に2回バス旅行があり、瑞木はそれなりに関東近辺のレジャー施設巡りやさまざまな体験をしていたが、作業所をやめ一般就労に移行してからというもの、職場が高齢者介護施設であるため社内旅行や飲み会などは皆無に近い。

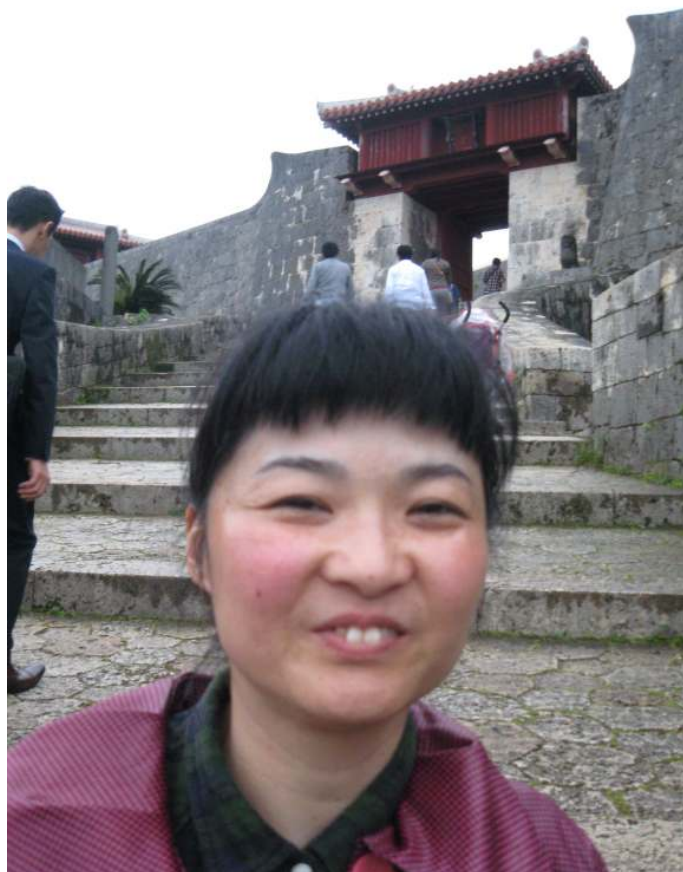
親たちがグループホームを運営していた頃のこと。日常とかけ離れた旅は変化が多く大パニックを起こすからと、長年あきらめてきた親子(家族)がいた。しかし、パニックにめげないで旅を企画し実行するうち、子どもがパニックを起こしても親は恐れなくなった。その親の変化にも子どもの発達にも驚かされた。グループホームは障がいをもつ子どもが何かの縁で家族らしい暮らしを選択することである。利用する家族は、何かの縁で同じ屋根の下に暮らす子どもをもつ親子として、ある意味では気のおけない家族同士である。旅を繰り返すうち、家族あるいは親子が旅の喜びを感じられるようになり、旅行は意味があることに気づかされた。旅行は個人的なことが多く含まれており、なかなか利用者や家族の意思の統一は難しいところがある。けれど、一度裸で付き合う(実際温泉にも入る)とその後の親しみが違ってくる。親亡き後を考える親としては、世話人さんと仕事抜きで話すことも安心感が大きいと思う。世話人さんも家族と当事者の関係性を捉える機会にもなっている。

ある親御さんが亡くなったとき、このような旅行の写真が会場に多数飾ってあった。故人の顔はどれも笑っていた。そして、生命の最後の年月に息子さんとの旅行が実現できたことはその家族の宝物だったと知った。娘が利用している障がいのグループホームの旅行は、年に一度あるかないか。それも最近は職員が障

がい者の旅行の意味をどのように考えているのかわからない。熱意も感じられない。親たちは高齢になってきている。こちらの思いをどれだけ話しても伝わらないもどかしさがある。

現実に生きている人から学ぶ力が薄い。個人的な思いをどれだけ想像力を膨らませて受け取るかどうか、あるいは仕事を理解した上で当事者から学び、創造力を発揮できるかどうかといった柔らかい考え方にかかっている。当事者が教えてくれることに耳を傾けられないようではケアの仕事は無理というもの。障がいのケアは早晚行き詰まる。娘から長年かかって私たちは学んだ。それゆえ、旅行好きの瑞木が親亡き後のグループホームで余暇の一部として経験できるかどうかは疑わしいのではないかと近年私たちは心配している。

それより以前、福祉作業所の40人以上のバス旅行を、あるときから瑞木は好まなくなっていた。その理由を私はずっと考えるようになった。障がいをもつ子どもの親の研究の途中で、アメリカのシラキュース大学のウルフフェンスバーガー教授の『ソーシャル・ロール・パロリゼーション』に出会い、その訳がわかった。



首里城にて

障がいのある人が集団行動するとき、多くの人には好奇の目でみる。「あの人たちは障がいをもっているから、集団で行動せざるを得ない」と思われてしまう視線の先には、「障がいをもつことは価値のない人間」というレッテルが貼られたりしている。シラキウスで会った障がいをもつ当事者たちも同じ感想を語っていた。福祉作業所から一般就労で個として役割を果たせるようになったときに、娘が自分で感じた大切な思いなのだ。そのことが長い間好まない娘の思いだったと気づいてから、旅行は家族旅行か家族が含まれた小集団の旅行と決めている。そのどちらかが現状の娘の旅のチャンスなのだが、本人の希望はなかなか叶えられない。

さて、家族で行く旅では娘の思いが成就するように配慮し、行き先を決めてから、行きたい場所、観たいものや食べたいものがあるところをガイドブックで物色し、計画を立てる。その役目は母親の私。今回、沖縄本島の旅のルートは新聞広告を参考にし、初日は那覇に到着後市内観光、2日目は北上しヤンバル地区と水族館のある西エリア、3日目は中部地区、4日目は南部エリア、5日目は帰京となった。ゆっくりとしたスケジュールはいつもの旅と同じ。急いで旅をしても面白くない。何のために旅の時間があるのかわからなくなる。気持ちが落ち着かず、同行者とぶつかるはめにもなってしまう。結局楽しくない。その点、瑞木との旅の時間は気分が良い。ちっとも焦らず、あわてず、3人でゆったりと行動することができるからだ。

機内では都立特別支援学校高等部の生徒さんと一緒だった。瑞木が高等部のときの修学旅行は新幹線を使って飛騨高山への旅だった。現在では飛行機を体験するよい機会になっていることを知る。搭乗前の空港では緊張の面持ちの生徒さんが多数いたけれど、瑞木は彼らよりずっと大人びて見えた。24年前の東京駅集合の朝、喜びと緊張の娘を私は大分心配したが、さすがに今はパニックになることはない。機長が機内放送で「今日は〇〇特別支援学校の修学旅行の生徒さんが当機に同乗しています。どうぞ楽しい沖縄の旅になりますように。」と挨拶の終わりに付け加えたが、私たちも同じ気持ちであった。「飛行機大丈夫ですよ、旅行楽しんできてね。」と心の中で応援する。

午後2時、那覇空港へ着陸。滑走路に自衛隊のヘリコプターが数機見える。他の飛行場と違うと感じ、リラックスしている軀が固くなる。ここはそういう場所という自覚と緊張は、実際、目で見ないと伝わらない

ことは多々ある。まさにそういうものだった。ここの空気は濃い灰色かな。

レンタカーに乗り換え、首里城を目指す。傍らの家人がナビ係。途中でそば屋を発見。直行。沖縄そばを食べずして沖縄を語るなかれとの忠告をどこかで聞いてきたからか、迷わず入店、注文する。そばと言っても食べ慣れているそばと違う。スープの味はしっかりとしたカツオだし。そばは小麦粉からできている。その上には大きな豚肉の塊。初体験のミックス感が食欲をそそる。「泡盛とそばの組み合わせもなかなかいい感じ」と夫が笑って言う。食欲旺盛の3人はこの先どうなるのか、沖縄最初の食物は胃にすんなりと収まった。

ガイドブックによると、首里城では琉球舞踊が観られるとか。入場とともに瑞木と私は、酔いのためか歩みの遅い夫を尻目に、舞踊場「系図座・用物座」を目指して早足となる。最終回16時からの方がすでに始まっていた。美しい琉球衣装をまとった女性たちがゆっくりとした動きで空に舞う。以前NHKで琉球ドラマ「テンペスト」を観ていたときの仲間由紀恵さん演じる琉球王朝のヒロインにどこか似ている風にも思える。その動きを目で追うとタイムスリップしていきような気持ちになり、沖縄ではなく琉球に今いることの思いが強く湧いてきた。歩き続ける首里城内は小雨に群れた石畳が続いている。この地で起こったさまざまな現象は目には見えないけれど、あたりには悲しみも喜びもそのままに昔の人の気配が漂っているように感じる。ここの空気は青鼠色かな。



琉球舞踊

旅行ではお土産を買うのが瑞木の目的の大きいところ。首里城では紅型染めの自分用ハンドタオルを買った。国際通りにはお土産店がたくさんあるとの情報により、ホテルのチェックインを済ませ、そこを目指すことにする。

山のような沖縄土産を前に娘はどれを買ったらよいのかわからない様子。とりあえず、2匹の猫の面倒を見てくれている弟夫婦に泡盛を1本、お世話になっている主治医(精神科・皮膚科・歯科)の先生には沖縄の塩を購入。「絶対、食べた方がいい」と弟から勧められたハンバーガーも3人で頬張った。確かに付け合わせのポテトの味と量が違って、新鮮な食感。私はセンスの良い琉球陶器や琉球ガラスに目を引かれるが、娘のお土産探しが優先順位の第一番と思い直す。

優先順位は人それぞれ。我が家の場合は瑞木への配慮が一番になっている。彼女の甘えやわがままではない。私たちは心からそうしたいと願っている。瑞木を優先すると、私たちの心が安定につながる。自分を優先順位の一番にする必要が全くないことが心地よいということ。言葉で説明するのは難しいが、そうしたいと思う自分が好きだという感じかしら。

結局、お土産探しはまだまだ先があるからということになり、那覇の夜をゆっくりと過ごすことにする。



高速道路を北上

2日目。車は高速道を一路、北部ヤンバル地区の大宜味村にあるカフェ「がじまんろー」という店を目指す。「ここに行ってみてよ」と画家の弟夫婦が勧めてくれた。昨年彼らは友人の眞謝大輔さんのお母さんが開いているこの店にお邪魔し、居心地のよい時間を過ごしたそうだ。



がじまんろーにて眞謝さんと

国道から山道に入ると本土とは違う沖縄の木々が迫ってくる。雨と風が木々を揺らしている。小さな看板を目印にいくつかのカーブを過ぎると「がじまんろー」が現れた。大工のお父さんや家族で作ったというすてきなカフェ。木の手触りがする室内、ともだちの家にお邪魔しているような懐かしい気分、ガラス窓を開けると大宜味村のシンボル坊主森という山が目前に現れる。山の神様の大きな手が私を包み込み、ハグしてく



ブランコ

れるようだ。テラスの先の広い庭にはブランコやハンモックがある。畑によもぎが育っている。あたりはシークワサーの林も見える。眞謝さんの家はシークワサー農家でもある。お店の定番ドリンク「シークワサー手絞りジュース」とバナナケーキ、お母さんが「うちのはおいしいのよ」と自慢していた特製よもぎ入りピザを楽しんだ後も、絵本を読み、「ここで画家の個展を開催したいね」と話をし、心が伸びきったままでいられる心地よさを味わい尽くした。

画家は小さい頃からブランコが大好きだった。1998年に「ブランコ」の絵も描いた。ここでもブランコに乗った。長いロープが画家を乗せて、谷まで連れて行きそうに見える。スリリングを楽しむ娘は昔に戻っているように見える。どこの公園に行ってもすぐにブランコに突進した。すぐに立ち漕ぎができるようになった。順番を理解できるまでは泣くことも多くあった。42歳の今、余裕を持ってブランコを楽しんでいる。ブランコ一つでも、人は変わる。私には娘とのブランコの思い出がたくさんあることに気づいた時間だった。ここは画家の好きな緑色の風が吹いていた。

時計はすっかり午後。古宇利島を目指し、出発。この場所をすすめてくれたのは家人の仕事仲間。「海がすごくきれい。橋を渡って島に渡る。」という話の通り、海の色がエメラルドブルーに透き通って輝いている。夏はどのようになるのかしら。4月下旬はまだ人も少ない。

ここから美ら海水族館を目指し再出発。途中、14～15世紀にかけてこの地を治めたという王様の居城今帰仁遺跡、トンネルのような緑の木々が集落を包んでいる備瀬のフクギ並木を観て、水族館へ。16時



古宇利島にて

以降の入館は人気も少なくゆったりとしている。全長8.5mのジンベイザメが巨大水槽の中を泳ぐ姿に大勢の人が釘付けになる。



美ら海水族館

画家は「くじらといか」の絵を描いているが、この巨大サメには興味を示さない。他の魚類にも関心はないので、早々とお土産コーナーへ行く。画家は自分用のハンカチとヘアゴムを購入。私はこの水族館が大好きという中学2年のMさんを思い出し、Mさんに水色のタオルと楽しそうなイラスト入り一筆箋を求めた。

ここから数キロ走り、今夜の宿に到着。ホテルは海のそばに立っている。部屋の窓からはどこまでも透き通っている海が見える。ベランダからは島の明かりが見え、海上にいるような錯覚に陥る。疲れた軀に波の音が心臓のリズムに合わせて響いてくる感じ。海の存在が軀の一部のようだ。波の音は副交感神経に作用し

ている。心が退行している。海色の空気に包まれ深い安寧が訪れているのを感じて眠りについた。

3日目。どうしてもほしい琉球陶器を探しに道を南下する。読谷村やちむんの里という陶芸の集落を掘り出し物はないかとキョロキョロしながら歩く。家族分3個の茶碗が見つかった。かなり気に入った。

昼食に北谷町アラハビーチでレゲエの店のチキンの丸焼きを目指して行った。この店も弟からのお勧めだった。自転車の仲間が帰郷し、チキンを焼く仕事をしているとのこと。あいにくお休みということでタコスライス初めて食べる。夜はガイドブックで見つけた古民家を改造したイタリアンの店に予約をし、久しぶりにゆっくりとした夕飯をとった。この店の給仕さんがとてもよい動きをしていたのが印象的。飲み物や料理だけではなく、雰囲気良さに夫も娘も満足し、残波岬のホテルに戻る。沖縄の食べ物はいろいろあって興味深い。



やちむんの里の登窯

4日目。再び高速道路を南下し、糸満市の平和祈念公園を目指す。どうしても外せない場所として、最後の日程に行く決めていた。はじめに公園内を案内してくれるバスに乗り、大型船の漁師から案内のボランティアになった我那覇さんという方から沖縄戦の話を詳しく聞かせていただいた。県毎に慰霊碑が作られている広い園内を巡って、摩文仁の丘上に出た。ここから大勢の人たちが身を投げたという崖がそそり立って見える。遥か下に広がる海に人々が死んでいった情景が語られる。日米20万人のいのちが沖縄の土の上で海の中で消えていった。今日は静かな海が広がっている。戦後70年、霊魂は静まったのだろうか。花束を3人で供え手を合わせ祈る。

24万人の名前が刻まれた平和の礎の道を歩く。平和資料館では沖縄戦の資料、写真パネルやジオラマを



座喜味城跡にて



タコスライスとタコスと好物のパンケーキ



平和祈念公園

見て回る。私たちが知識として認識していることの何倍も教えてくれるこの場所に圧倒されながら、「見ると聞くは大違い」とつぶやきながら、私は娘の手をしっかり握っていることに気がついた。きっと私たちのように手をつなぎ戦場を逃げ回った母子がいたのだ。人間を狂気にさせる戦争に新たな怒りを感じて外に出ると、青い空から強い日差しが容赦なく照らしてきた。忘れてはいけない人間の所業を太陽はずっと見続けている。ここに来てよかったと思った。



摩文仁の丘

帰り道、沖縄が創世されたという伝説の場所に向かう。斎場御嶽は琉球の原初から神聖な場所として崇められているところだという。観光客の好き勝手な行動は禁止されている。森は昼なのに暗い。石畳が続く。木々が自然のままに伸びている。巨大な石が重なりあって三角形のトンネルができています。湿り気の帯びた空気が肌にまとわりつく感じがする。言葉も少ないまま、3人はここを後にする。

沖縄は私たちに教えていると思う。行かなければわからないこと、見なければわからないことがあることを。しかし、行かなくても見なくてもわかる人はどこの世にもいる。書物という入り口を入ることによって、想像力を理解力に変える人が大勢いるに違いない。沖縄の旅は深い。もっと勉強をしなればと念じた。

沖縄最後の夕方は牧志公設市場にお土産を買いに行った。海産物、農産物が沢山陳列されている狭い通りを歩く。2階でサーターアンダギーという甘い揚げドーナツの美味しさにほっとする。島らっきょうも購入。塩ソフトクリームも味わった。旅の終わりは沖縄料理で締めくくった。



斎場御嶽



牧志公設市場

5日間の旅は中身が濃い。沖縄のガイドブックが私たちをさまざまなところへ連れて行ってくれた。沖縄に行ったことは、瑞木の中にどのような思い出になっているのかしら。

「みーちゃん、沖縄はどうだった?」「楽しかった! 飛行機るとき静かにしていた。小さい子はうるさいね! 勝手に行っちゃうから。」「勝手に行っちゃうと心配だよな?」「心配だよな。水族館の時、小さい子は泣いていたよな。ハンカチと水色のゴム買った。ハンカチ買った。くらのお土産買った。海到くんと直子さんと忠俊さんと明子さんにも買ったの。12時と3時に缶コーヒーを買ったの。アーモンドチョコ買った。サンドイッチとホットドッグを買った。おにぎり買った。お寿司も買った。飛行機で食べた。そばを食べた。コロケを食べた。ラーメン食べた。金井先生と今福先生と澤先生にもお土産買った。自分にもカレー塩、買った。お弁当に。赤い車に乗った。」とのこと。

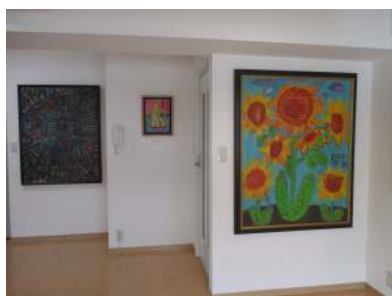
「みーちゃん、話が上手になったね。感想を聞いてとてもうれしいよ。ちっとも絵は描かないけれど、違う喜びがあるよ。またどこかに行こうね。」

平成26年度会計報告

(単位：円)

I 経常収入の部	
1. 会費収入	148,000
2. 寄付金収入	272,000
3. 受取利息	133
経常収入合計	420,133
II 経常支出の部	
1. 事業費	
(1)障がいをもつ人を中心とした芸術活動の 支援と作品の公開展示	206,460
(2)障がいをもつ人を中心とした心理教育社 会福祉研究と実践	0
(3)障がいをもつ人を中心とした交流の促進	0
(4)芸術、教育、心理、福祉などに関する社 会教育	0
(5)障がいをもつ人とその関係者のための個 別相談、教育支援、生活支援	0
(6)活動に関する広報および成果の公表	161,449
(7) (1)～(6)の事業活動のための募金	0
2. 管理費	11,192
経常支出合計	379,101
経常収支	41,032
前期繰越	877,740
次期繰越	918,772

田中瑞木美術館の夏



7～9月は夏の絵が展示されています。50号の「花火」「ひまわり」「くじらといか」をはじめ、「線香花火」「さかな」「カラーのささやき」「ヨット」など。

10月には秋の絵に展示替えをします。「秋のサファリパーク」「花とレモン」など。お楽しみに。



平成27年度会費納入のお願い

平成27年度の会費・寄付金の納入をお願い申し上げます。美術館の活動をはじめ本法人の事業に生かしてまいります。

昨年度は、多くの方々からたくさんのご入金をいただきました。ありがとうございました。

年会費

正会員 3,000円以上 (活動にご参加いただけます)

協力会員 1,000円以上 (会報をご購読いただけます)

賛助会 30,000円以上 (法人様を対象としております)

寄付金 (随時お受けしております)

振込口座

①ゆうちょ振替：00110-0-684539

②銀行振込：みずほ銀行 調布支店

普通預金 8082621

口座名称 (①②とも)

特定非営利活動法人 海から海へ

編集後記

今号は画家の良い写真でいっぱい。狙って撮った訳ではない。旅は非日常。「ここははじめてのところ、こんなことははじめて、なんか楽しい」。画家の顔はそう言っている。

画家の老人ホームでの仕事は、8年目になる。今の世の中、「障がい」の人が「ふつう」の職場でこれだけ仕事を続けるのは並大抵のことではない。家でもパン作り、お掃除、買い物など、骨惜しみしない。「人が喜ぶ」ことをするのが好き、としか思えない。

でも、「それだけでは面白くないな。日常の安定感と、非日常の高揚感。生活には両方ないとね」と写真の画家は言っているように思う。親がいなくなっても彼女はそういう生活をしているだろうか？私たちがやるべきことはまだまだたくさんある。

(輝)

特定非営利活動法人 海から海へ

<http://umi.or.jp> office@umi.or.jp

振込口座 ゆうちょ振替：00110-0-684539

みずほ銀行 調布支店 普通預金 8082621

2015年8月26日 海から海へ No. 39

編集責任者 阿部公輝

〒182-0024 東京都調布市布田 1-32-5

マートルコート調布 407

Tel 042-441-2958 Fax 042-497-4878

発行所 〒157-0073 東京都世田谷区砧 6-26-21

特定非営利活動法障がい者団体定期刊行物協会

定価 200円